

研究論文

# 世界遺産の参詣道「熊野古道」を歩くことで得られる感嘆喚起経験

## Awe-inspiring experiences while walking on the World Heritage pilgrimage route, Kumano Kodo

伊藤 央二<sup>1</sup>、河野 慎太郎<sup>2</sup>

Eiji Ito, Shintaro Kono

1 和歌山大学観光学部准教授

2 アルバータ大学キネシオロジー・スポーツ・レクリエーション学部助教

キーワード：感嘆喚起経験、熊野古道、世界遺産、サプリメンタル観光行動、スポーツツーリズム

Key Words : awe-inspiring experiences, Kumano Kodo, World Heritage, supplemental tourism activities, sport tourism

### Abstract :

The purpose of this study was to examine whether walking on a World Heritage pilgrimage route, Kumano Kodo, provided tourists with awe-inspiring experiences. An open-ended questionnaire survey was conducted for participants in the masters sport event (i.e., the Nenrinpic Kinokuni Wakayama 2019). A total of 85 people took part in either the Kumano Kodo daytrip or overnight guided tours after their competitions, and 40 tourists provided useable data. By using a deductive coding approach, 13 tourists' responses were coded into (a) vastness and/or (b) retrospective/perspective moments. Vastness related to both physical and natural aspects of Kumano Kodo, while retrospective/perspective moments reflected the history and culture of Kumano Kodo. These awe-inspiring experiences appeared to facilitate cognitive accommodation (schema change) among the participants. These results suggested that walking on Kumano Kodo provides tourists with extraordinary experiences that are not attainable from walking in an everyday life. Understanding awe-inspiring experiences will play a pivotal role for outdoor sport tourism development in Japan after the international sporting events (e.g., the Olympic and Paralympic Games Tokyo 2020).

## I. 緒言

日本では、ラグビーワールドカップ、東京五輪、ワールドマスタースゲームズの国際的スポーツイベント開催に伴い、スポーツツーリズムが脚光を浴びている(Hinch & Ito, 2018)。しかし、イベント期間中だけではなく継続的に観光客を呼び込むためには、アクティブスポーツツーリズム（週末や休暇でのスポーツ参加を目的とした観光）が2020年以降のスポーツツーリズムの持続的発展の鍵となる（原田, 2016）。特に、森林率7割弱を誇り、6,000以上の島を持ち、アウトドアスポーツ資源の宝庫と呼ばれる日本において（原田, 2016）、アウトドアスポーツツーリズムはこれらの国際的スポーツイベント後のスポーツツーリズムの発展において重要な役割を果たすことが予想される（Ito, 2020; 伊藤, 2020a）。実際に、笹川スポーツ財団（2016）のオンライン調査における「今後スポーツ実施を伴う旅行をする場合、どのような種目を実施したいですか?」との問いに対し、上位5種目中3種目（i.e., スキー・スノーボード、海水浴、登山）がアウトドアスポーツであった。加えて、日常の種目別運動・ス

ポーツ実施率において、「散歩（ぶらぶら歩き）」と「ウォーキング」が2006年から2016年の10年間でそれぞれ変わらず1位と2位を推移し続けていることから（笹川スポーツ財団, 2017）、手軽に行えるアウトドアスポーツの1つとして、自然での野外ウォーキングが注目される。ウォーキングは高次元の競技性（e.g., 対戦相手との競争）に根差したスポーツではないが、過去の自分自身との競争（e.g., 歩くスピード、距離、姿勢）といった低次元での競技性に当てはまり、このようなレクリエーションスポーツを含む包括的アプローチは、スポーツツーリズムの文脈において重要視されている（Higham & Hinch, 2018）。

観光の視点から野外ウォーキングを考察する際、野外ウォーキングを実施する場所自体が観光地として成り立っている事例が存在する。国内における事例では、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産の一部に登録された熊野古道が挙げられる。2001年に世界遺産に登録された熊野古道は、熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社からなる熊野三山を目的地とした参詣道であり、古来より天皇から貴族、庶民に

至るまであらゆる身分の人々を受容した「祈りの道」という点から一般的なウォーキングコースと異なり、新型コロナウイルス感染症拡大前の2019年までは観光地として国内外から多くの観光客を惹きつけてきた。また、熊野古道が持つ歴史的・宗教的背景の周知という面に関しては、1986年に「紀州語り部の会」（現熊野本宮語り部の会）が組織され、観光ガイドの養成が行われてきたように、世界遺産登録以前から熊野古道に沿った各地域において観光客をガイドする語り部の活動が活発な観光地として報告されている（寺田，2019）。このような熊野古道が持つ歴史的・宗教的背景から、古からの参詣道を歩くことは身体的および心理的にポジティブな影響をもたらし、それが熊野古道の魅力となっていることが指摘されている（長野・伊藤，2018）。実際に、和歌山県では世界遺産の熊野古道を活用したヘルスツーリズム（e.g., 熊野古道健康ウォーク）が展開され、注目を浴びている。

観光や野外ウォーキングを包括するレジャー活動は、快感情の向上や逃避など、さまざまな心理的経験を私たちにもたらすことが報告されている（Ito, 2020; Mannell & Iso-Ahola, 1987）。レジャー学では心理的経験の中でも、快感情（e.g., 興奮）のような一般的な心理的経験と「意味深い心理的経験（psychologically deep experiences）」と呼ばれる特別な心理的経験を区別している（Mannell, 1996）。意味深い心理的経験としてフロー経験やスピリチュアル経験等が報告されているが（Fenton & Walker, 2016）、近年、アウトドアツーリズムの文脈において調査対象となっている感嘆（awe）も意味深い心理的経験の1種として捉えることができる（Powell et al., 2012）。特に、感嘆は日常生活圏から離れるスポーツツーリズムを含む観光行動と非常に密接な関連性があると考えられる（Coughlan et al., 2012）。熊野古道のような世界遺産かつ参詣道という歴史をもつ場所でのウォーキングは、数百年の歴史や数千年を生きる自然の直接的体験の機会を与え、散策者の自己を超えた思考や価値観への思索を促すことで、感嘆を喚起することが推察される。しかし、これまでスポーツツーリストの感嘆喚起経験（awe-inspiring experiences）、特に世界遺産の熊野古道のような場所を対象にした研究は行われていない。そこで本研究では、熊野古道でのウォーキングが観光者の感嘆喚起経験につながるかを明らかにすることを研究目的とした。

## II. 先行研究の検討

感嘆は、現在の心的構造を圧倒する壮大さ（vastness）に対する感情反応である（Keltner & Haidt, 2003; Shiota et al., 2007）。壮大さをもたらす刺激には、自己、これまでの経験、そして価値判断と行動の基準枠より大きいと感じるすべてのものが含まれる。一般的には、自然の物理的な大きさ（e.g., グランドキャニオン）が挙げられるが、榮譽や権威といった経験的な刺激まで含まれる（Keltner & Haidt, 2003）。また、数式

の深遠さ（Shiota et al., 2007）や出産体験の神秘さ（Wang et al., 2020）も壮大さとして捉えることが可能である。加えて、従来の自身の理解を凌駕してしまう壮大さは、認知的な調節（accommodation）欲求を促すことが明らかにされている。このプロセスでは、既存の価値観と感嘆喚起経験のずれに注意が向けられ、このずれを小さくする（なくす）ために新たな価値観が生み出される（Shiota et al., 2007）。このため、感嘆は、このような調節が成功することでポジティブな経験として、失敗することでネガティブな経験として解釈されるのである。日本語においても、国語辞典（松村，2006）で指摘されているように、多くの場合、感嘆はポジティブ感情として捉えられるが、時として、ネガティブ感情（嘆き悲しむ）としても捉えられる。この「壮大さ」と「調節」という2つが、感嘆を構成する核となる要素であることが、これまでの心理学の研究（Keltner & Haidt, 2003; Shiota et al., 2007）で報告されてきている。

観光商品や観光地は観光客に感嘆を引き起こさせる必要があると指摘されているように（Coughlan et al., 2012）、感嘆は観光と密接に関連している。Coughlan et al. (2012) は自由記述形式で得た回答のコーディングを通して、観光の文脈の感嘆には、時系列に並ぶ3要素が存在することを報告している。1つ目は、「息をのむような」や「衝撃的な」に代表される即時的な生理的反応である。2つ目は、「記憶に残る」や「珍しい」を含む過去の経験との比較である。3つ目は、「謙虚な」や「創造的な」に代表される心的な構造変化である。これらの時系列から生まれる感嘆は、態度的・行動的ロイヤリティ、地域愛着、地域保護行動に結びつく可能性をCoughlan et al. (2012) は指摘している。研究は限られているものの、感嘆と観光は「壮大さ」という視点からアウトドア／ネイチャーツーリズムの文脈で研究が進められている。Powell et al. (2012) は南極観光ツアー参加者を対象に調査を行い、「南極観光経験があなたにどのような影響を与えましたか?」という質問から得られた回答を5つの感嘆喚起経験（スピリチュアルな結びつき、人生観を変えてしまう経験、人生目標の明確化、自然と人間の関係性の再考、謙虚な気持ち）に分類している。調査参加者の22.3%がいずれかの感嘆喚起経験（各種類約4%）を報告し、Powell et al. (2012) はネイチャーツーリズムの文脈においても、感嘆は重要な心理的経験であり、その感情は多面的であることを報告している。Pearce et al. (2017) も同様に、オーストラリアのキンバリー地域でのネイチャーツーリズムを対象に感嘆喚起経験の研究を行っている。彼らはネイチャーツーリストへの面接調査を通して、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用い、5つの感嘆喚起経験（海域生物、審美性、生態的現象、壮大な地理的景観、内省的／大局的瞬間）を明らかにしている。これらの質的研究の結果から、観光の文脈においても、Keltner and Haidt (2003) と Shiota et al. (2007) が報告している「壮大さ」（e.g., 即時的な生理的反応、人生観を変えてしまう経験、壮大な地理的景観）と「調

節」(e.g., 心的な構造変化、謙虚な気持ち、内省的／大局的瞬間)に関わる感嘆喚起経験が明らかにされていることがうかがえる。

一方、Lu et al. (2017) は量的手法を用いて、巡礼観光と感嘆の関連性を明らかにしている。仏教の聖地とされる中国四川省の峨眉山への観光者を対象に質問紙調査を行い、「自然環境の壮大さ」と「宗教的雰囲気的神聖さ」が感嘆を喚起し、観光満足度にポジティブに影響を与えていることを報告している。加えて、巡礼観光者と非巡礼観光者の違いに注目し、巡礼観光者の感嘆は「宗教的雰囲気的神聖さ」によってよりもたらされる一方、非巡礼観光者の感嘆は「自然環境の壮大さ」によってよりもたらされることを明らかにしている。先述した通り、本研究の調査対象地である熊野古道は峨眉山と同様、巡礼観光地であり、一般的なウォーキングとは異なる心理的経験をもたらすことが観光研究で示唆されている。Progano et al. (2020) は熊野古道への日本人およびオーストラリア人観光者を対象に、熊野古道の価値に焦点をあてた面接調査を行っている。日本人観光者の回答からは、「自然」、「スピリチュアリティ」、「歴史」、「世界遺産登録」が抽出された一方で、オーストラリア人観光者の回答からは、「ウォーキング／ハイキング」、「自然」、「地元住民」、「食事」、「歴史／文化」、「田舎」、「スピリチュアリティ」が抽出された。彼らの研究は感嘆喚起経験を明らかにした調査ではないが、これらの抽出された熊野古道の価値は、Lu et al. (2017) が明らかにした感嘆喚起経験である「自然環境の壮大さ」や「宗教的雰囲気的神聖さ」と大きく重なることがうかがえる。

また、このような感嘆喚起経験を観光の文脈で精査する場合、観光ガイドによる影響も予想される。例えば、Tu et al. (2020) は観光ガイドのユーモアが観光者の心理的経験にポジティブに影響していることを報告している。先述したように、観光ガイドである語り部の活動が活発な熊野古道(寺田, 2019)では、語り部からの熊野古道の歴史文化に関する説明を通して、感嘆喚起経験がより強いものになるかもしれない。これは心理学において「先行刺激によって後続の刺激の処理が促進される現象」(川口, 1995, p. 225)と定義されるプライミング効果と重なるものがある。実際に、Moorhouse et al. (2017) は野生動物観光アトラクションの研究において、野生動物保護情報に関するプライミングが調査参加者の観光行動意図にポジティブな影響(粗悪な野生動物観光アトラクションへの訪問意図低減)を与えていることを明らかにしている。

以上のことより、熊野古道を歩くこと(特に、語り部と共に)がもたらす心理的経験には感嘆が含まれることが予想されるが、これまでの研究では一般的な快感情・不快感情(Komori et al., 2017; 長野・伊藤, 2018)やスピリチュアル経験(Kato & Progano, 2017)が対象とされてきた。アウトドアスポーツツーリズムにおける感嘆喚起経験を、世界遺産の参詣道である熊野古道を調査地として明らかにすることは、国際的なスポーツ

イベント開催後のスポーツツーリズムの持続的発展を目指す日本において、非常に有意義な研究テーマであるといえる。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 調査対象者・ツアー

2019年11月9日～12日にかけて、和歌山県において60歳以上の人々が中心となってスポーツや文化などのイベントで交流を深める「第32回全国健康福祉祭和歌山大会 ねりんピック紀の国わかやま2019」(以下、「ねりんピック2019」とする)が開催された。ねりんピックとは、全国健康福祉祭の愛称であり、「スポーツや文化種目の交流大会を始め、健康や福祉に関する多彩なイベントを通じ、高齢者を中心とする国民の健康保持・増進、社会参加、生きがいの高揚を図り、ふれあいと活力ある長寿社会の形成に寄与するため、厚生省創立50周年に当たる昭和63(1988)年から毎年開催」されている参加型スポーツイベントである(厚生労働省, n.d.)。このスポーツイベントには全国から延べ約56万人が参加し(ねりんピック紀の国わかやま2019大会実行委員会, 2020)、来県した参加者へ和歌山県の魅力を発信する絶好の機会となった。

ねりんピック2019大会実行委員会では、大会参加者向けの13の観光ツアーを提供し、そのうち2つのツアーが熊野古道を語り部と共に歩く旅程を含むものであった。そこで、これら2つの観光ツアーへの参加者(日帰りツアー64名、宿泊ツアー26名)を対象に、直接配布直接回収法を用いた質問紙調査を各ツアー終了後に実施した。日帰りツアーは熊野那智大社から大門坂を歩くコース(約2.7km)であった。宿泊ツアーは熊野古道館から近露(1日目)および熊野那智大社から大門坂(2日目)を歩くコース(約15.7km)であった。

#### 2. 調査方法

本研究では、「社会的事態や文脈によって影響を受ける個人の行動を研究する」(藤原, 2005, p. 67)社会心理学的アプローチを用いた。感嘆喚起経験は心理学で研究されてきたが、観光の文脈での心理的経験は観光過程での社会的相互作用に影響されるため、社会心理学的アプローチが有効であると考えられる。本研究では自由記述回答方式を使用し、「データに付したコードを手がかりに、データを変換(conversion)、縮約(compression)して表示(display)することで、データに潜在する意味を見出す手法である」(大谷, 2017, p. 655)質的データ分析を用いた。調査参加者に「今回、熊野古道を歩かれて感じたことや普段のウォーキング(トレッキング含む)と違った経験等ございましたら、お聞かせください」と尋ね、得られた回答を電子データ化した。その後、Pearce et al. (2017)の5つの感嘆喚起経験のカテゴリーを先行研究および熊野古道の文脈に合わせ修正し、演繹的コーディングを行った。ボトムアップと称される帰納的コーディングとは対

照的に、演繹的コーディングはトップダウンと称され、理論や先行研究の知見（本研究では Pearce et al., 2017）に基づきデータを分類する手法である（Braun & Clarke, 2006）。

本研究で行ったカテゴリの修正は次の3点である。1点目は、「審美性」、「壮大な地理的景観」、「生態的現象」を1つのカテゴリ「壮大さ」に統合した。Pearce et al. (2017)は「言葉のをむ (spectacular)」、「信じられない (incredible)」、「美しい (beautiful)」といった描写を「審美性」として分類していたが、このような自身の理解を凌駕する審美的刺激も壮大さと捉えることが可能であるだけでなく（Shiota et al., 2007）、その刺激が審美性もしくは地理的景観によるものか判別することは非常に困難である。実際に、Lu et al. (2017)も「自然環境の壮大さ」に自然の審美性の項目を含めている。加えて、Pearce et al. (2017)の「生態的現象」は、調査対象地の2つの主要な観光アトラクションであるモンゴメリーリーフ（世界最大の沿岸礁）と水平滝（水平滝）に焦点をあてたカテゴリであり、地理的景観という視点からの「壮大さ」と大きく共通する点があることから、こちらも「壮大さ」に統合することにした。なお、Pearce et al. (2017)とLu et al. (2017)は主に自然環境の壮大さのみ焦点を当てていたが、熊野古道は大社や石畳という人工的景観も含むため、本研究では自然景観だけではなく人工的景観も対象とするカテゴリとした。2点目として、Pearce et al. (2017)の「内省的／大局的瞬間」は、Kato and Prozano (2017)とProzano et al. (2020)が報告した熊野古道の有する歴史・文化の重

要性に基づき、熊野古道の歴史的／文化的要素を振り返る「回顧的／大局的瞬間」へと変更した。最後に、熊野古道の地理的位置を考慮し、Pearce et al. (2017)の「海域生物」を「野生動物」へと修正した。

筆頭筆者が内容分析を行った後、第2筆者が全データおよび分析結果を確認し、不明瞭な点について議論を行い<sup>1)</sup>、最終的なコーディング結果を導いた。なお、1つの文が2つ以上の意味を持つことがあるため（Ito & Walker, 2014）、コーディング分析では一般的な複数コーディングを用いた。なお、回答者には個人属性（性別、年齢、配偶関係、熊野古道を歩いた回数）についても尋ねた。

#### IV. 結果・考察

##### 1. 調査参加者の個人属性

計85名のツアー参加者が質問紙調査に参加した。日帰りツアーの全64名の参加者からは59名、宿泊ツアーからは全26名の参加者が調査に参加した。そのうち、自由記述回答を記入したのは40名（日帰りツアー24名、宿泊ツアー16名）であり、その回答を有効回答とし、データ分析を行った。有効回答を提供した調査参加者の性別は、男性55.0%（22名）・女性45.0%（18名）であり、平均年齢は68.5歳（最小年齢59歳、最高年齢81歳）であった。熊野古道訪問の平均回数は1.2回で、5名が2回目、1名が3回目であり、大多数の参加者が初めての熊野古道訪問であった。

表 1. 感嘆経験のコーディングカテゴリと分析結果

本研究 カテゴリ	Pearce et al. (2017) カテゴリ	説 明	回 答
	審美性		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 古道を歩くのは疲れましたが、とっでもリフレッシュできました。さすが世界遺産でした。那智の滝の壮大さに感動しました。</li> <li>・ 石ダタミの長さ。</li> <li>・ 自然の中でとてもおごそかな気持ちになりました。</li> </ul>
壮大さ	壮大な地理的景観	熊野古道の物理的な大きさやその自然の雄大さに触れることによってもたらされる心理的経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 雨の中の古道、その周りの空気やたたずまいがたいへん神秘的でよかったです。</li> <li>・ 杉並木の間を歩く古道はやはりすごいと思います。</li> <li>・ <u>古の人たちが築いた古道・石の階段そして数百年の樹木等、すばらしいものでした。</u></li> <li>・ 静寂の中で歩く事が出来た。（那智大社）</li> <li>・ 大変すばらしいところであった。パワーをもらった。</li> <li>・ 日常生活では感じられない心の穏やかさを感じました。</li> <li>・ すばらしい。</li> </ul>
	生態的現象		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>古の人たちが築いた古道・石の階段そして数百年の樹木等、すばらしいものでした。</u> 当時から現在までの時間のつながりすごいです。</li> <li>・ 古の先人たちの熱意の古道（象徴）を歩きながら、何とも言えない感謝・感動・感激の気持ちを共有でき楽しい体験でした。</li> <li>・ 歴史の長さ。信仰心の強さ。</li> </ul>
回顧的／大局的瞬間	内省的／大局的瞬間	熊野古道の歴史や文化に触れることによってもたらされる心理的経験	
野生動物	海域生物	熊野古道に生息する野生動物に触れることによってもたらされる心理的経験	該当なし

注) 下線は複数コーディングに該当した回答を示す。

## 2. 演繹的コーディングの分析結果・考察

電子データ化された自由記述回答は1,505文字であった。演繹的コーディングを用いた分析を行い、感嘆喚起経験を3つのカテゴリー（「壮大さ」、「回顧的／大局的瞬間」、「野生動物」）にコーディングした。表1には、本研究で用いた3つのカテゴリーとその説明およびPearce et al. (2017)の5つのカテゴリー、そして分析結果をまとめた。

最も数多く報告された感嘆喚起経験は、熊野古道の雄大さに触れることによってもたらされる「壮大さ」（10名：30.0%）であった。感嘆の核となる物理的な大きさ（Keltner & Haidt, 2003; Shiota et al., 2007）に関して、「古道を歩くのは疲れましたが、とっつくりフレッシュできました。さすが世界遺産でした。那智の滝の壮大さに感動しました。」（女性63歳）および「石ダタミの長さ。」（男性64歳）という回答が得られた。Lu et al. (2017) や Pearce et al. (2017) が明らかにしていた自然環境の壮大さ（那智の滝）に加え、石畳といった人工的景観も観光地での感嘆を研究するうえで、重要なアトラクションであることが示唆された。また、熊野古道の自然の雄大さがもたらす感嘆経験に関しても、「自然の中でとてもおごそかな気持ちになりました。」（女性62歳）、「雨の中の古道、その周りの空気やたたずまいがたいへん神秘的でよかったです!」（女性65歳）、「杉並木の間を歩く古道はやはりすごいと思います。」（女性63歳）、「古の人たちが築いた古道・石の階段そして数百年の樹木等、すばらしいものでした。」（女性68歳）といった回答を得ることができた。Progano et al. (2020) が、日本人とオーストラリア人の両グループが熊野古道の自然を高く評価していたと報告していたように、熊野古道の豊かな自然が観光客の感嘆を喚起していることが考えられる。また、Lu et al. (2017) が非巡礼観光者の感嘆喚起経験には「自然環境の壮大さ」が大きく影響していたことを明らかにしているように、今回のツアー参加者は参加型スポーツイベントの参加者であり、巡礼が今回の観光の主目的ではなかったことも本研究結果に反映されているのかもしれない。最後に、抽象的な回答ではあるが、熊野古道の雄大さという視点から、「静寂の中で歩く事が出来た（那智大社）。」（女性67歳）、「大変すばらしいところであった。パワーをもらえた。」（男性60歳）、「日常生活では感じられない心の穏やかさを感じました。」（男性69歳）、「すばらしい。」（男性80歳）も本カテゴリーに分類された。Kato and Progano (2017) と Progano et al. (2020) が熊野古道のユニークさにスピリチュアル経験を報告しているように、これらの神秘的経験が感嘆へとつながっていることが推察される（Powell et al., 2012）。長野・伊藤 (2018) も同様に、熊野古道を歩いた調査参加者が「神聖な雰囲気につつまれ心が洗われる思いがする」と自由記述回答を残していることを報告している。これは、Lu et al. (2017) が中国での巡礼観光において、「宗教的雰囲気の神聖さ」が感嘆につながっていた結果とも一致し、熊野古道が持つ宗教的側面も壮大さとい

う感嘆喚起経験につながっていることが推察される。

コーディングされた回答数（3名：8%）は少なかったが、熊野古道の歴史や文化に触れることによってもたらされる「回顧的／大局的瞬間」も熊野古道での感嘆を喚起する刺激となることが本研究結果より示唆された。本カテゴリーには、「古の人たちが築いた古道・石の階段そして数百年の樹木等、すばらしいものでした。当時から現在までの時間のつながりすごいです。」（女性68歳）、「古の先人たちの熱意の古道（象徴）を歩きながら、何とも言えない感謝・感動・感激の気持ちを共有でき楽しい体験でした。」（男性63歳）、「歴史の長さ。信仰心の強さ。」（男性65歳）、という自由記述回答が分類された。Progano et al. (2020) が明らかにした通り、約1,000年にもおよぶ熊野古道の歴史は国内外の観光客を惹きつける強力なアトラクションであり、感嘆を喚起することが本研究結果より示唆された。Keltner and Haidt (2003) と Shiota et al. (2007) が主張する感嘆喚起経験の壮大さは、景観と同様に、熊野古道が有する1,000年という非常に長い時間軸にも当てはまるものだと考えられる。また、彼らが主張する2つ目の感嘆要素である「調節」についても、従来の自分自身の立ち位置を考える際の時間軸の基準点に変化がうまれたという心的な構造変化と捉えることができる。Pearce et al. (2017) の元々のカテゴリーは「内省的／大局的瞬間」であったが、観光地での心理的経験を通して新たな人生における視点を獲得するといった彼らの主張は、熊野古道の歴史や文化に触れることによっても可能であることが示唆された。この「回顧的／大局的瞬間」に加えて、普段のウォーキングでは体験することのできない「壮大さ」も、Coghlan et al. (2012) が指摘する未来志向型スキーム変化の要素（a future-oriented schema-changing component）のように、参加者の心的な構造変化につながっていることが推察される。

3つ目のカテゴリーである「野生動物」には、自由記述回答は分類されなかった。熊野古道には、イノシシ、ニホンジカ、タヌキ、ニホンザル、ウグイスなどの野生動物が生息していると言われているが（三重県立熊野古道センター、2018）、今回のツアーは団体ツアーであったため、あまり時間的なゆとりもなく、熊野古道での野生動物の生息地までたどり着けなかったことが原因であるのかもしれない。また、田辺市熊野ツーリズムビューロー（n.d.）が、「周辺には、豊かな自然が残されており、野生動物等（クマ、イノシシ、スズメバチ、マムシ等々）に遭遇する可能性が高くなります。安全に歩くために、事前に地元市町村等の情報を十分に収集してください」と注意喚起をするように、熊野古道では野生動物は鑑賞対象とみなされていないのかもしれない。

最後に、今回の感嘆経験は観光ガイドでもある語り部によるプライミング効果を考慮する必要があると考えられる。熊野古道などの参詣道は単に参詣道のみを見て歩くだけでは価値の伝わり難い文化遺産であると考えられ、これらは十分な解説

を行ない、一定の知識（平安時代からの参詣の歴史があり、神仏習合の宗教文化による自然に抱かれた山岳霊場が複数の参詣道のネットワークによって結ばれ、それらが山々などの自然環境とともに歴史的な佇まいを残しながら現代まで継承されているなどの熊野古道に関わる知識）を得ながら体験してもらうことが不可欠である。実際に、参加者から「案内人の人がいて説明してくれてとても良かった。」（女性 75 歳）や「どこにも語り部さんが案内してくれましたので、良くわかり三社回れて良かったです。」（女性 63 歳）」という回答が得られた。古い石畳、相当な樹齢を感じさせる樹木、遙拝所（王子）跡などの熊野古道の奥深い歴史性を想起させるアトラクションをただ単に見ることによって得られる視覚的体験だけではなく、語り部から得られたそれらを束ねる歴史文化に関する知識のもとで再構成された心理的経験が感嘆経験をより強いものになっているかもしれない。一方で、40 名中 12 名（30.0%）のみの回答が感嘆経験に分類されたように、7 割の参加者からは感嘆経験に関する報告は認められなかった。自由記述という調査方法の限界もあるが、「特になし 特別とは思わない。」（男性 68 歳）という回答もあったように、今後は感嘆喚起経験の有無で参加者特性の比較を行う必要性もあると思われる。

## V. 結論

本研究では、熊野古道でのウォーキングが観光者の感嘆喚起経験につながるかを明らかにすることを研究目的とし、ねんりんピック 2019 参加者を対象に実施された熊野古道観光ツアー参加者に自由記述回答を用いた質問紙調査を行った。演繹的コーディングの分析結果から、熊野古道を歩くことによって感嘆を喚起する「壮大さ」と「回顧的／大局的瞬間」という心的経験がもたらされることが明らかとなった。これらの感嘆喚起経験は、Coghlan et al. (2012) の即時的反応（e.g., 「息をのむような」、「衝撃的な」）にも共通し、このような心理的経験が一般的に観光客の求める「Awesome」な体験、アウトドアスポーツツーリストであれば、普段のウォーキングでは感じることでできない心理的経験につながると考えることができる。さらに、これらの経験は従来の心的な構造変化と呼ばれる「調節」につながることが示唆された。特に、本研究の調査対象者は語り部から熊野古道の歴史文化に関する知識の提供があり、その情報がこのような感嘆経験を喚起していることも示唆された。今後、アウトドアスポーツツーリズムを推進していくためには、感嘆のような日常生活でのウォーキングでは得られない心理的経験を喚起する要因（e.g., 壮大さ、回顧的／大局的瞬間、語り部、事前知識）を理解し、マーケティングに活用していくことが必要不可欠だと考えられる。

本研究の目的ではないが、本結果はサブリメンタル観光行動の理解促進にも貢献すると考えられる。ねんりんピック 2019 大会参加に付随した今回の熊野古道観光ツアーは、主目的

の観光行動（i.e., 大会参加）を補完するサブリメンタル観光行動と呼ばれ、参加者の全体的な観光満足を高めることに貢献することが期待されている（伊藤, 2020a, 2020b）。本研究では「スポーツからスポーツ」（i.e., 大会参加から野外ウォーキング）に関するサブリメンタル観光行動であったが、「スポーツから非スポーツ」（e.g., 大会参加から旧跡巡り）や「非スポーツからスポーツ」（e.g., 友人・親戚訪問から野外ウォーキング）に関するサブリメンタル観光行動についても理解を深めることが、新型コロナウイルス感染症後のスポーツツーリズム推進に求められる（Ito & Higham, 2020）。

最後に、本研究の研究の限界および今後の研究の方向性を述べる。まず、観光ツアー終了後の質問紙調査での自由記述回答ということで、本調査で得られたデータが比較的少なかった点が研究の限界として挙げられる。このため、「大変すばらしいところであった。パワーをもらえた。」（男性 60 歳）という回答を熊野古道の雄大さという視点から「壮大さ」に分類したが、この感嘆喚起経験が何（e.g., 自然景観、人工的景観）に起因するまでかは明らかにすることができず、データの解釈に幅を残す結果となってしまった。今後は、フォーカスグループや面接調査を用いて質的に感嘆喚起経験の理解を深めていくと同時に、量的なアプローチからも熊野古道での感嘆喚起経験を明らかにしていく必要があると考えられる。その際には、多局面にまたがる観光経験（期待、往路、現場、復路、回想：Clawson & Knetsch, 1966）という視点を基に、複数回の調査が理想と考えられる。また、サブリメンタル観光行動としてではなく、旅行の主目的として熊野古道を歩く観光者の感嘆についても調べる必要があるだろう。そして、Lu et al. (2017) が中国の峨眉山で明らかにしているように、熊野古道特有な側面である巡礼観光者と非巡礼観光者の相違・類似点を明らかにすることも求められるだろう。最後に、今回の調査対象者は語り部と共に歩くツアー参加者であったが、語り部の有無での比較調査やプライミング実験を通して、熊野古道の歴史文化に関する知識が感嘆経験に及ぼす影響を明らかにすることが今後求められる。このような研究の限界が挙げられるが、本研究がこれまでのスポーツツーリズム研究で等閑視されてきた感嘆喚起経験を、世界遺産の参詣道「熊野古道」という文脈で明らかにしたという点は学術的にも実践的にも非常に有益であり、今後は国内観光分野において感嘆喚起経験のさらなる知見の蓄積が求められる。

## 謝辞

本調査の実施にご協力くださいました和歌山県福祉保健部福祉保健政策局ねんりんピック推進課の西川様、中野様、小笠原様、尾花様、ねんりんピック紀の国わかやま 2019 宿泊・輸送センターの下神様、福森様に感謝の意を表します（所属は当時のもの）。

本研究は JSPS 科研費 19K20568 の助成を受けたものです。

## 注

1) 筆者間では分類された回答文の性質的や言語的意味合いに関して、「審美性と神秘性」(壮大さ)、「壮大さと広大さ」(壮大さ)、「個人的回顧と人類的回顧」(回顧的/大局的瞬間)の相違について、議論を行った。

## 引用文献

- Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, 3 (2), 77-101. <https://doi.org/10.1191/1478088706qp063oa>
- Clawson, M., & Knetsch, J. L. (1966). *Economics of outdoor recreation*. Johns Hopkins Press.
- Coghlan, A., Buckley, R., & Weaver, D. (2012). A framework for analysing awe in tourism experiences. *Annals of Tourism Research*, 39 (3), 1710-1714. <https://doi.org/10.1016/j.annals.2012.03.007>
- Fenton, L., & Walker, G. J. (2016). Development of the psychologically deep experiences (PDE) in nature scale. *Leisure/Loisir*, 40 (1), 101-129. <https://doi.org/10.1080/14927713.2016.1169436>
- 藤原武弘 (2005) コミュニティ政策への社会心理学的アプローチ. *コミュニティ政策*, 3, 66-84. <https://doi.org/10.11192/jacp.3.66>
- 原田宗彦 (2016) スポーツ都市戦略:2020年後を見据えたまちづくり. 学芸出版.
- Higham, J., & Hinch, T. (2018). *Sport tourism development* (3rd ed.). Channel View Publications.
- Hinch, T., & Ito, E. (2018). Sustainable sport tourism in Japan. *Tourism Planning & Development*, 18 (1), 96-101. <https://doi.org/10.1080/21568316.2017.1313773>
- Ito, E. (2020). Understanding cultural variations in outdoor tourism behaviors for outdoor sport tourism development: A case of the Blue Mountains National Park. *Tourism Planning & Development*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1080/21568316.2020.1807401>
- 伊藤央二 (2020a) ポスト東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会のスポーツツーリズム政策. *観光学評論*, 8 (1), 45-53.
- 伊藤央二 (2020b) ねんりんピック紀の国わかやま 2019 でのサブリメンタル観光ツアー開発と参加者のツアー満足と心理的経験についての関連性. *観光学*, 23, 55-65. <https://doi.org/10.19002/AA12438820.23.55>
- Ito, E., & Higham, J. (2020). Supplemental tourism activities: A conceptual framework to maximise sport tourism benefits and opportunities. *Journal of Sport & Tourism*, 24 (4), 269-284. <http://doi.org/10.1080/14775085.2020.1850322>
- Ito, E., & Walker, G. J. (2014). Similarities and differences in leisure conceptualizations between Japan and Canada and between Japanese leisure-like terms. *Leisure/Loisir*, 38 (1), 1-19. <https://doi.org/10.1080/14927713.2014.880613>
- Kato, K., & Prozano, R. N. (2017). Spiritual (walking) tourism as a foundation for sustainable destination development: Kumano-kodo pilgrimage, Wakayama, Japan. *Tourism Management Perspectives*, 24, 243-251. <https://doi.org/10.1016/j.tmp.2017.07.017>
- 川口潤 (1995) プライミング効果の認知心理学: 潜在認知・潜在記憶. *失語症研究*, 15 (3), 225-229. <https://doi.org/10.2496/apr.15.225>
- Keltner, D., & Haidt, J. (2003). Approaching awe, a moral, spiritual, and aesthetic emotion. *Cognition and Emotion*, 17 (2), 297-314. <https://doi.org/10.1080/02699930302297>
- Komori, T., Mitsui, M., Togashi, K., Matsui, J., Kato, T., Uei, D., ... & Kinoshita, F. (2017). Relaxation effect of a 2-hour walk in Kumano-Kodo Forest. *Journal of Neurology and Neuroscience*, 8 (1), 174-179. <https://doi.org/10.21767/2171-6625.1000174>

- 厚生労働省 (n.d.) 全国健康福祉祭 (ねんりんピック) の概要. <https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/nenrin/gaiyo.html>
- Lu, D., Liu, Y., Lai, I., & Yang, L. (2017). Awe: An important emotional experience in sustainable tourism. *Sustainability*, 9 (12), 1-15. <https://doi.org/10.3390/su9122189>
- Mannell, R. (1996). Approaches in the social and behavioral sciences to the systematic study of hard-to-define human values and experiences. In D. D. B. L. Driver, T. Baltic, G. Elsner, & G. Peterson (Eds.), *Nature and the human spirit* (pp. 405-415). Venture Publishing.
- Mannell, R. C., & Iso-Ahola, S. E. (1987). Psychological nature of leisure and tourism experience. *Annals of Tourism Research*, 14 (3), 314-331. [https://doi.org/10.1016/0160-7383\(87\)90105-8](https://doi.org/10.1016/0160-7383(87)90105-8)
- 松村明編 (2006) 大辞林第三版. 三省堂.
- 三重県立熊野古道センター (2018) 熊野古道ってなあに?三重県地域連携部南部地域活性化局 東紀州振興課. [https://www.kodo.pref.mie.lg.jp/assets/download/what\\_kodo.pdf](https://www.kodo.pref.mie.lg.jp/assets/download/what_kodo.pdf)
- Moorhouse, T. P., D' Cruze, N. C., & Macdonald, D. W. (2017). The effect of priming, nationality and greenwashing on preferences for wildlife tourist attractions. *Global Ecology and Conservation*, 12, 188-203. <https://doi.org/10.1016/j.gecco.2017.11.007>
- 長野慎一・伊藤央二 (2018) 熊野古道を歩くことがもたらす多局面にわたる感情経験について. *生涯スポーツ学研究*, 15 (1), 11-23. <https://doi.org/10.14838/jjls.15.11>
- ねんりんピック紀の国わかやま 2019 大会実行委員会 (2020) 第 32 回全国健康福祉祭和歌山大会 ねんりんピック紀の国わかやま 2019 大会報告書.
- 大谷尚 (2017) 質的研究とは何か. *薬学雑誌*, 137 (6), 653-658. <https://doi.org/10.1248/yakushi.16-00224-1>
- Pearce, J., Strickland-Munro, J., & Moore, S. A. (2017). What fosters awe-inspiring experiences in nature-based tourism destinations? *Journal of Sustainable Tourism*, 25 (3), 362-378. <https://doi.org/10.1080/09669582.2016.1213270>
- Powell, R. B., Brownlee, M. T., Kellert, S. R., & Ham, S. H. (2012). From awe to satisfaction: Immediate affective responses to the Antarctic tourism experience. *Polar Record*, 48 (245), 145-156. <https://doi.org/10.1017/S0032247410000720>
- Prozano, R. N., Kato, K., & Cheer, J. M. (2020). Visitor diversification in pilgrimage destinations: comparing national and international visitors through means-end. *Tourism Geographies*, 1-22. <https://doi.org/10.1080/14616688.2020.1765013>
- 笹川スポーツ財団 (2016) 「旅先でのスポーツ実施に関する Web 調査」報告. <http://www.ssf.or.jp/research/report/category1/tabid/1137/Default.aspx>
- 笹川スポーツ財団 (2017) スポーツ白書 2017: スポーツによるソーシヤルイノベーション. 笹川スポーツ財団.
- Shiota, M. N., Keltner, D., & Mossman, A. (2007). The nature of awe: Elicitors, appraisals, and effects on self-concept. *Cognition and Emotion*, 21 (5), 944-963. <http://doi.org/10.1080/02699930600923668>
- 田辺市熊野ツーリズムビューロー (n.d.) ご協力のお願ひ. <https://www.tb-kumano.jp/kumano-kodo/tips/>
- 寺田憲弘 (2019) ガイドとしての語り部/表象としての語り部: 熊野古道の語り部を事例として. *観光研究*, 31 (1), 33-44. [https://doi.org/10.18979/jitr.31.1\\_33](https://doi.org/10.18979/jitr.31.1_33)
- Tu, H., Guo, W., Xiao, X., & Yan, M. (2020). The relationship between tour guide humor and tourists' behavior intention: A cross-level analysis. *Journal of Travel Research*, 59 (8), 1478-1492. <https://doi.org/10.1177/0047287519883033>
- Wang, E., Shen, C., Zheng, J., Wu, D., & Cao, N. (2020). The antecedents

and consequences of awe in dark tourism. *Current Issues in Tourism*.  
<https://doi.org/10.1080/13683500.2020.1782857>

受理日 2020年11月25日